

(様式6)

京田 亜由美 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 The World that Appears As One is Deprived of Life:
A Qualitative Study of the Lived Experiences of Terminal Cancer Patients
(人生を奪われた後に見えてくる世界：終末期がん患者の生きた体験の質的研究)
Nursing Science Quarterly(in press),2019
Ayumi kyota, Kiyoko Kanda

論文の要旨及び判定理由

終末期がん患者は自らの死を実感し、生と死の意味を問い直す。しかし、終末期がん患者の生と死の認識は明らかにされておらず、認識への接近は現場の看護師の力量にかかっているため、ターミナルケアを困難にしている。本研究の目的は、終末期がん患者の生と死に関する体験を明らかにすることである。

対象は、在宅ケアホスピス（HCH）、緩和ケア病棟（PCU）、一般病棟緩和ケアチーム（IPCT）のサポートを受けている終末期がん患者18名である。2～5回のインタビューを行い、逐語的記録を作成し、現象学的心理学アプローチを用いて分析した。

結果、在宅、緩和ケア病棟、一般病棟で過ごす終末期がん患者の生と死に関する体験の構造として、「死ぬほどの苦しみの体験が故の普通の生活の微かな光への新たな感謝」「逃れられない死への認識とせめて穏やかに逝きたいという願い」「愛する人や自分たちのように苦しんでいる患者のために役立ちたいという希望」の3つのテーマが抽出された。

終末期がん患者は、生を語りながらも死の意味や思いを、死を語りながらも生の意味や思いを語っており、生と死が対立せず、重なり合いながら、共に希望につながるという新たな知見を見いだした。

本研究は、終末期がん患者の死の語りを傾聴し、語りに内包される感情や希望に気づくことの重要性を示唆し、がん看護の発展に寄与すると認められ、博士(看護学)の学位に値するものと判定した。
(令和元年11月6日)

審査委員

主査 群馬大学大学院教授
看護学講座 二 渡 玉 江 印

副査 群馬大学大学院教授
看護学講座 常 盤 洋 子 印

副査 群馬大学大学院教授
看護学講座 内 田 陽 子 印

参考論文

1. How to Come to Terms with Facing Death: A Qualitative Study Examining the Experiences of Patients with Terminal Cancer

(死を前にどのように折り合いをつけるのか：終末期がん患者の体験の質的研究)

BMC Palliative Care 18:33,2019

Kyota A, Kanda K